

シュヴァルツェスマーケン・えくすとら♪

第1話「ドタバタ学園生活の始まり」

1. 新しい朝

『勝てるなんて…まだ信じてるの…？』

テオドールの全身全霊の捨て身の攻撃によって、リズの全身に戦術機の破片が次々と刺さり…それでも激しい出血の中、息絶え絶えになりながらも、リズは愛しの表情で眼前のテオドールを見つめていた。

『反乱軍なんて馬鹿ばかり…嘘つきばかりなんだよ…。』

『……。』

『どうせすぐに逃げ出す…だから…助けてあげようと…したのにさ…お兄ちゃん馬鹿で頑固だから……。』

(…お兄ちゃん！！)

『どうしてなの…？ねえ、分かんないよ！！どうしてそんなに反乱軍が好きなの！？』

『…リズ…。』

『あいつらお兄ちゃんを利用してるだけだよ！！東ドイツを変えてみせる！？嘘だよ！！出来るはずがない！！そんなの出来るはずが…っ！！あがつ、がはあっ！！』

激しい吐血によって、リズの言葉が遮られる。

これだけの傷では、リズはもう助からないだろう…テオドールは悲しみの表情で、自分が傷つけた…傷つけざるを得なかった、たった1人の大切な妹を見つめていた。

(…ねえ、お兄ちゃんってば！！)

(うん…むにゃむにゃ…あと5分…)

それに仮に助かったとしても、革命軍は決してリズを許さないだろう。

兄を助ける為だったとはいえ、リズはシュータージュの一員として多くの人々をその手に掛け、そしてかつての仲間にも拷問をしてかし…ファムを殺したのだ。

いずれにしてもこのままリズを助けたとしても、待っているのは革命軍による公開処刑だ。

いや…かつてリズが666小隊の者たちに行ったように、過酷な拷問によって生き地獄を味わされ続けられる事になるかもしれない。

『…ねえ…私と来て、お兄ちゃん…私はただ、お兄ちゃんと一緒にいたいだけ…！！』

そうなる位なら、いっそ俺がこの手でリズを楽にしてやらなければ…テオドールは覚悟を決めて、ハンドガンの銃口をリズに向けた。

『…お前と一緒に逝く事は出来ない。俺には叶えなければならない願いがある。』

『…お兄…ちゃん…。』

『ごめんなリズ…父さんに言われてたのに、お前の事を守ってやれなくて…！！』

(早く起きないと、学校に遅刻しちゃうよ！！)
(うるさいなあ리즈・・・あと5分って言ってるだろ・・・。)

『お前が俺をシュータージから救ってくれた・・・だから今度は、俺がお前をシュータージから救ってやらなきゃな・・・！！』

目に大粒の涙を流しながら、ハンドガンの引き金に指を掛けるテオドール。
そんなテオドールの心情を察したのか、리즈も安らかな笑顔で、特に抵抗もせずに、自分に銃口を向けるテオドールを見つめていた。

(んもう、お兄ちゃんの頑固者！！こうなったら・・・！！)

『だって・・・俺は・・・俺はお前の・・・お兄ちゃんなんだから・・・！！』
『お兄・・・ちゃん・・・』

パン！！
テオドールが放った銃弾が・・・리즈の脳天を貫いたのだった・・・。
身を震わせ嗚咽するテオドールを、駆けつけたアネットが優しく抱き締め・・・

「いい加減・・・起きろ——————っ！！」
「うおあああああああああああああああつ！？」

리즈に無理矢理布団をひっぺ返され、テオドールは強引に叩き起こされたのだった・・・。
春の清々しい陽気に包まれ、未だに虚ろな意識の中、テオドールの視界に映ったのは・・・頬を膨らませながら自分を見つめている、制服姿の리즈の姿だった。
訳が分からないまま、テオドールは無理矢理리즈に手を引っ張られて、強引にベッドからも強制的に立ち上がらされる。

「・・・は？・・・あ？・・・え！？」
「もう、お兄ちゃんったら、やっと起きてくれた・・・。」
「リ、리즈・・・！？何でお前がここにいる！？」
「何でって、お兄ちゃんが全然起きないから、お母さんに頼まれて起こしに来たに決まってるでしょ！？」

そう言いながらも리즈は慣れた手つきで、テオドールのパジャマのボタンを次から次へと外しにかかるのだった。
あまりの恥ずかしさに、テオドールは思わず赤面してしまう。

「分かった、分かったから、あとは俺が自分でやるから、お前は部屋を出て行ってくれ！！」
「やだ。」
「何でだよ！？」
「お兄ちゃんが二度寝しないように監視してろって、お母さんに言われてるもん。」
「いや、だったらせめて後ろを向いててくれ！！このままだと恥ずかしくて、とてもじゃないが着替えられねえんだよ！！」

そう言ったテオドール自身が後ろを向いて、慌ててパジャマを脱いで制服に着替え始めた。

不貞腐れるリズだったが、まあリズの気持ちも分からなくもない。

今日から新しい高校生活が始まるというのに、初日から寝坊して遅刻なんて事になったら、それこそホーエンシュタイン家は近所の笑い者だ。

自分が笑われる分には全然構わないのだが、これでもホーエンシュタイン家に居候させて貰っている身なのだ。リズや彼女の両親にまで迷惑を掛けるわけにはいかない。

気を引き締めながら、テオドールはネクタイをせっせと結ぶ。

それにしても、先程まで寝ていた時に観たあのリアルな夢は、一体何だったのか。

何故か互いに巨大なロボットに乗って自分とリズが殺し合って…そして戦いに勝利した自分が強引にリズの機体のコクピットをこじ開け、何故か自分がリズを銃で殺してしまった夢。

夢と呼ぶにはあまりにもリアルで…そしてあまりにも悲しくて残酷な…。

いやいやいやいやいや、そんな事は今更どうだっていい。

1階では今頃リズの両親が朝食を用意して、テオドールとリズが降りてくるのを今か今かと待っているはずだ。

というか、早くしないと本当に学校に遅刻してしまう。

「ふう…よし、着替えたぞリズうえあああああああああああああああ！？」

「もう、お兄ちゃんったら遅い〜。」

「いやいやいやいやいや、何で後ろを向いてないんだよお前は！？」

「…ところでお兄ちゃんってトランクス派だったんだあ。」

「はあああああああああああああああああああん(泣)！！」

下着姿を見られてしまった…。

「リズの馬鹿…俺…俺…もうお婿に行けない！！」

「もう、何馬鹿な事言ってるのよ…ほら、ネクタイ曲がってるよ？」

溜め息をつきながら、リズはテオドールの曲がったネクタイを、慣れた手つきでさっさと修正したのだった。

頬を赤らめながら、リズは小さな声で、そっ…と呟く。

「…お婿に行けないなら、私がお兄ちゃんを貰ってあげるんだから…。」

「は？今何か言ったか？リズ。」

「う、うん、何でもない！！ほら、ネクタイ直したから、早く朝ご飯食べに行こ！？」

「あ、ああ…。」

リズに手を引っ張られ、テオドールは慌てて1階の居間へと向かう。

漂ってくる焼きたてのパンのとってもいい香りが、目覚めたばかりのテオドールの食欲を刺激したのだった。

居間ではリズの父親が新聞を読みながら優雅にコーヒーを飲んでおり、リズの母親が父親の分の食器をせっせと片付けていた。

空いた2人分の席に、出来立てのオムライスと食パン、サラダ、コーヒーが並べられている。

「お早う。テオドール君があまりにも遅いから先に食べさせて貰ったよ。はっはっは。」

「ああ、ごめんな父さん、ちょっと寝坊しちゃって…。」

慌てて席に着いたテオドールは、母親の手作りの朝食をとても美味しそうに食べ始めた。
テオドールの隣の席で、リズもまたテレビを観ながら美味しそうに朝食を食べている。
家族4人での一家団欒の、当たり前の光景・・・だがテオドールは自分がその「当たり前の光景」の中に溶け込んでいる事に、心の底から充実感を覚えていた。
何故ならテオドール自身が、かつてはこの「当たり前の光景」を享受する事が出来ない環境に置かれていた経験があるのだから。

テオドールは幼い頃に両親を事故で亡くし、児童養護施設で育てられていた。
そんな彼をリズの両親・・・テオドールの母親の遠縁の親戚であるホーエンシュタイン家が善意で引き取り、こうして家族として迎えられたのだ。
だがこうして家族としての幸せを掴み取ったテオドールとは対照的に、今でも虐待され、施設や親族にたらい回しにされ、天涯孤独になってしまう子供たちもまた大勢いる。
そしてこうしている今もまたテレビのニュースにおいて、母親が娘を虐待して逮捕されたなどという報道がなされていた。
自分が両親を失ったからこそ、幸せを掴み取ったからこそ、こういったニュースを聞くたびにテオドールは悲しい気持ちになってしまうのだが・・・。

「・・・ご馳走様、母さん。凄く美味しかったよ。」

冷めかけたコーヒーをさっさと口の中に流し込んだテオドールは立ち上がり、自分の分の食器を流し台へと片付けたのだった。
今こうして自分が幸せを掴み取った以上、自分と違い天涯孤独になってしまった子供たちの分まで、精一杯幸せに生きないといけない・・・それが幸せを掴み取った自分がやらなければならない事なのだと、テオドールはそう考えているのだ。

「ほらお兄ちゃん、朝ご飯食べたなら早く学校に行こう！？早くしないと入学式に間に合わないよ！？」

「分かった、分かったからリズ、そんなに引っ張るなって。」

「2人共、今日はお昼までには帰って来れるのよね？」

「ああ、今日は入学式だけだから、昼までには帰ってくるよ。」

リズに手を引っ張られながら、テオドールは慌てて靴を履いて玄関を出る。
入学式に相応しい、とても清々しい青空、そして温かい太陽の日差しが、テオドールとリズを優しく包み込んでいた。
一体友達が何人出来るのだろうか・・・リズと同じクラスになれるのだろうか・・・どんな充実した学園生活が待っているのか・・・テオドールはそんな期待を胸に抱き・・・。

「行ってらっしゃい2人共。車に気をつけてね。」

「ああ、それじゃあ行ってきます！！」

リズの母親に見守られながらリズと手を繋ぎ、テオドールは清々しい笑顔で新たな学園生活への第一歩を踏み出したのだった。

2. 学園生活の始まり

リズはテオドールの事を「お兄ちゃん」などと呼んでいるが、リズの方が誕生日が2ヶ月程遅いだけであり、2人は同じ年で同学年である。

それでもテオドールが養子に来るまでは一人っ子で、寂しい思いをしてきた影響もあるからなのか、リズはテオドールの事を最高のお兄ちゃんだと思っているのだ。

そんなリズの事を怪訝な目で見ると近所の人たちも少なからずいるのだが、当のリズ本人は全く気にしておらず、公衆の面前でテオドールと手を繋いだり腕にしがみついたり、事ある毎にテオドールに甘えまくっている。

こんな日々が、永久に続けばいいのに・・・リズは心の底からそう思う。

互いに手を繋ぎながら、テオドールとリズは幸せそうな笑顔で学校へと向かっているのだが。

「そう言えば今日さ・・・変な夢を観たんだよなあ・・・。」

信号待ちをしている時、ふとテオドールがそんな事を言い出した。

「変な夢？どんな？」

「・・・何故か俺がリズを銃で撃ち殺す夢。」

「何で私がお兄ちゃんに銃殺されないといけないのよおっ！？」

「そんなの俺が知ってるよ・・・。だけど妙にリアルな夢だったんだよなあ・・・。」

あの時のハンドガンを手にする感覚、そしてロボットの操縦桿を握る感覚が、何故か今もテオドールの手に深く染み付いてしまっているのだ。

そう・・・まるで今すぐにあのロボットを動かしてみろと言われてたら、何故か自分の手足を操るかの様に自由に動かせる程までに。

だが一体何でまたテオドールがそんな物騒な夢を観たのかは知らないが、よりもよってこんな日に縁起でもない・・・目を潤ませながら、リズはテオドールの左腕にしがみついたのだった。

「お、おいリズ・・・。」

「もうその話はおしまいっ！！お兄ちゃんが私を殺すなんて縁起でもないよ！！」

「・・・ま、まあ・・・確かにそうだけどさ・・・。」

「だから、もう夢の事は忘れて！？ね！？」

あまりにも現実離れた、現実には絶対に有り得ない夢なのだが・・・それでもリズは不安で不安で仕方が無いのだ。

もしかしたらお兄ちゃんが、どこか遠くへ行ってしまうのではないかと。

テオドールもリズの不安を察したのか、もう夢の事を深く考えるのは一切止める事にした。

確かにリアル過ぎて気になってしまうのだが、だからと言って気にした所で仕方が無い。

「・・・ああ、悪かったなリズ。突然変な話をしちまってさ。」

「うん、分かってくればいいんだよ、お兄ちゃん。」

「さて、信号が青だし、そろそろ行くか。」

再び互いに仲良く手を繋ぎながら、テオドールとリズは今日から通う事になる高校・・・「私立マ

ブラヴ学園」の校門を潜り抜けた。

随分と妙な名前の学校だが、去年発足したばかりの学校なのだそうで、上級生も2年生までしかないらしい。

校門で待ち構えていた教師の指示を受けて、テオドールとリズはクラス分けの一覧が掲載されている看板が設置してある、グラウンドの奥へと向かったのだが。

「・・・やったねお兄ちゃん、私達同じクラスだよ！！」

「ああ本当だ。中学の時はお前と別々だったから、ちょっと不安だったんだけどな。」

歓喜の表情で、リズはテオドールの腕にしがみついたのだった。

というか中学時代はリズがテオドールにあまりにもべったりだったもんだから、教師たちが教育上良くないとか不謹慎だとかで、無理矢理2人を別々のクラスにってしまったのだ。

まあ確かにクラスは別々になったのだが、リズが休み時間の度にテオドールのクラスに突撃する上に、結局は家に帰れば一緒になるのだから、中学時代の教師たちの思惑はあんまり意味が無かったりする。

周囲の同級生たちもテオドールとリズ同様、クラス分けの一覧を見て一喜一憂していたのだが。

「さて、俺たちのクラスは1年3組だったな・・・。」

もうそろそろ教室に行かなければならない時刻だ。こんな所でいつまでものんびりしている訳にはいかない。

だが、テオドールとリズが教室に向かおうとした、その時だ。

「きゃああああああああああっ！！」

悲鳴が聞こえたと思った瞬間、クラス分けの結果に一喜一憂している新入生たちの集団から、1人の少女が弾き飛ばされた。

少女はとても痛そうに足を押さえている。どうやら新入生の1人が派手に暴れた際に突き飛ばされてしまい、右足を捻ってしまったようだ。

慌ててテオドールが少女の下に駆けつけ、心配そうな表情でしゃがみ込む。

「おい、大丈夫か！？」

「は、はい・・・い、痛っ・・・」

「馬鹿野郎！！てめえら少しは周りの迷惑も考えやがれえっ！！」

真剣な表情でテオドールに怒鳴り散らされ、少女を突き飛ばしてしまったらしい小太りの男が、申し訳無さそうに少女に謝罪したのだが。

右足を手で押さえる今の少女には、男の謝罪を受け入れる余裕さえも無いようだった。

「・・・どうやら足を捻ったみたいだな・・・待ってろ、すぐに保健室に連れて行ってやるからな。」

「いえ、私の事はどうかお構いなく・・・っ・・・！！」

「何馬鹿な事言ってんだ。目の前の怪我人を放っておく事なんて出来るわけねえだろ。」

「だけど私のせいで貴方が、入学初日から遅刻なんて事になってしまったら・・・」

「そんなの別に気にすんな。先生に事情を話せば分かってくれるだろ。」

「ですが・・・きゃあっ！？」

問答無用で、テオドールは少女をお姫様抱っこしたのだった・・・。

だが。

「…待っててねお兄ちゃん、私もすぐに行くから！！」

今度は一転して物凄く心配そうな表情で、慌てて保健室へと走り出す。
その様子を周囲の者たちが、啞然とした表情で見つめていたのだった…。

3. 出会い、そして再会

結局テオドールの迅速な行動のお陰で、少女の捻挫は軽症で済んだようで、テオドールとリイズは少女を保健室に残したまま、そのまま教室に行かずに入學式に直行したのだった。

だが入學式を終えて教室に向かったテオドールを待っていたのは、先程少女をお姫様抱っこして保健室に連れて行った事に対する、クラスメイトからの絶賛の嵐。

男女問わずに沢山のクラスメイトたちに囲まれて質問攻めに遭い、戸惑いを隠せないテオドールだったが、あれだけの騒ぎを起こしてしまったのだから仕方が無い事だと言えるだろう。

これはもう友達が出来るとかどうとか、最早そういうレベルの話ではない。
完全にテオドールは、クラスメイトたちから英雄扱いされてしまっているのだ。

「おいお前ら。そこの2人が困ってるだろうが。いい加減席に着け。」

そんな騒ぎの中、1年3組の担任となった先生が教室にやってきた。
テオドールを取り囲んでいたクラスメイトたちが、慌てて席に戻る。

「テオドールとリイズは初めましてだな。改めて自己紹介させてもらうぜ。今日からこのクラスの担任を務める事になったヨアヒム・バルクだ。」

テオドールたちの担任の先生となったヨアヒムは、いかにも筋肉質で豪傑な、とても大雑把な性格の中年男性といった感じだったのだが…。

「どいつもこいつもいいケツしてやがるなあ。お前ら今日からよろしく頼むぜ。」

ウホッ。

「さて、今日からお前らは晴れてこのマブラヴ学園の生徒となった訳だが、晴れやかな高校生活を満喫するにあたって重要な…」

ガラガラガラッ！！

ヨアヒムが言いかけた所へ、突然教室のドアが開け放たれたのだった。
そこに現れたのは…先程テオドールがお姫様抱っこして保健室に連れて行った少女。
どうやら彼女は偶然にも、テオドールやリイズと同じクラスだったようなのだが…。

「す、すみません、遅くなりました～！！」

「おうカティア。足の方はもう大丈夫なのか？」

「は、はい、テオドールさんが助けてくれたお陰…」

カティアと呼ばれた少女がテオドールの姿を確認し、とても満面の笑顔を浮かべたのだった。

テオドールもまた、カティアの姿を見て驚きを隠せない。
そしてリズもまた、カティアの姿を見て漆黒のオーラを隠せない。

「・・・ああああああああああああああああ！！テオドールさん！！」
「カティア、お前・・・！！俺と同じクラスだったのかよ！？」
「私もびっくりです！！まさかテオドールさんと同じクラスだったなんて・・・！！」

むぎゅっ。
とつても嬉しそうに、カティアは慌てて立ち上がったテオドールに抱き着いたのだった。
いきなりの出来事にクラスメイトの誰もが驚きの声を上げる。

「ちょ、ちょつと、おま・・・」
「えへへ、テオドールさんと同じクラスだなんて・・・嬉しいなあ・・・」
「ちょつとカティアちゃん！！お兄ちゃんが困ってるじゃないの！！離れなさいよおっ！！」

大好きなお兄ちゃんを取られてたまる物かと、慌ててカティアを引き剥がしにかかるリズだったが、カティアもまたリズに必死に対抗して、テオドールを決して放そうとしない。
なんかもう、睨み合うリズとカティアの視線の間で、物凄い火花がバチバチと鳴っていた・・・。

「・・・い～や～で～す～、放しません～っ！！そもそもテオドールさん、全然困ってるように見えないんですけど～っ！！」
「大体アンタが席に着かないせいで、先生の話が滞ってるじゃないのよ！！少しは先生の事も考えてあげなさいよおっ！！」
「じゃあ私、このままの体勢で先生の話を受けます！！それなら文句無いですよね！？」
「何でお兄ちゃんがそんな羞恥プレイを強要されないといけないのよおっ！？」

強引にカティアをテオドールから引き離し、慌ててテオドールを庇うように立ちはだかるリズ。
その様子をクラスメイトたちが、とても面白そうな表情で眺めていたのだった。
中には携帯やスマホを取り出し、ツイッターや2ちゃんねるで実況する者たちも・・・。

「ほら、さっさと空いてる席に座りなさいよ！！丁度お兄ちゃんの隣の席が空いて・・・っ！？」
「やったあ！！テオドールさんの隣の席です！！」
「ちょつと先生！！何でカティアちゃんがお兄ちゃんの隣の席なんですかあつ！？」
「別にいいじゃないですか、リズさんだってテオドールさんの隣の席なんだし！！」
「むぐぐ・・・！！」
「ぬぐぐ・・・！！」

睨み合うカティアとリズに挟まれ、戸惑いの表情を隠せないテオドール。
このままでは話が進まないもんだから、ヨアヒムも涙目になりながら2人に着席を促したのだが。

「・・・あ～お前ら・・・取り敢えず落ち着け。落ち着いてとにかく席に着け。いやマジで席に着いて下さいお願いします(泣)。」
「「.....。」」

さすがに自分たちの争いのせいで先生が困っている事を自覚したのだろうか。
リズもカティアも納得行かないといった表情ながらも、渋々自分の席に着席したのだった。

それからヨアヒムから3年間の高校生活を送るにあたっての注意事項とか、明日からの予定とか、アルバイトは禁止ではないが事前に申請して許可が必要とか、購買の焼きそばパンとコロケロールは1日50食限定だから気をつけろとか、とにかく色々な話を長々と、しかし生徒たちが退屈しないようにユーモア溢れる語り口で告げられたのだが。

ヨアヒムがそんな話をしている間にも、カティアとリズが互いに牽制し合うように睨み合っていたのだった…。

「…な、なあ…お前ら俺の話ちゃんと聞いてる…？」

「アルバイトは事前に申請が必要なんですよね！？」

「購買の焼きそばパンとコロケロールは1日50食限定なんですよね！？ご心配なく！！お兄ちゃんのお弁当は毎日私が作ってあげるんだから！！」

「そ、そうか…ちゃんと聞いてくれてるならいいんだけどさ…いいんだけどさっ…ぐすん(泣)」

キーンコーンカーンコーン…。

そうこうしている内に、あっという間に下校時刻になってしまったようだ。

「…ま、まあ話が長くなっちゃったが、とにかく要約するとだな…お前ら高校生活を存分に楽しめよって事だ。それじゃあ今日はこれで解散な。」

起立～。礼～。

ヨアヒムが教室を去った瞬間、再びテオドールの奪い合いを再開するリズとカティア。

互いにテオドールの腕にしがみつき、テオドールを絶対に渡すまいと、互いに決して譲ろうとしない。

「私、テオドールさんみたいなお兄ちゃんが欲しいって、前からずっと思ってたんです！！身を挺して私の事を助けてくれて、凄く優しくてかっこよくて…テオドールさんは私にとって理想のお兄ちゃんなんです！！」

「何がお兄ちゃんよ！！私と完全にキャラが被ってるじゃないのよ！！」

「ご心配なく！！私はリズさんと違って本当の妹じゃありませんから！！」

「あら残念だったわね！！私だってお兄ちゃんとは血が繋がってないのよ！！義理の妹なのよ！！だから結婚するにあたって何の障害も無いの！！分かる！？」

「け、結婚って、義理とは言え妹なんだから、そんなの絶対おかしいと思います！！」

「別におかしくは無いわよ！！法律上は全然問題ないんだから！！」

なんかもう2人の間に挟まれてるテオドールが、物凄い涙目になっているのだが。

そんな修羅場をクラスメイトたちが、とても面白そうな表情で眺めていた。

しまいにはタブレットを取り出し、ニコニコ生放送で実況し出す者まで現れる始末だったのだが。

「ちょっとアンタ、生放送したいなら本人に許可を取りなさいよ！！自分の姿を無断でネットで晒される人の気持ちを考えた事があるの！？」

「ひ、ひいっ！？」

「その妹もどき2人！！アンタたちもテオドールが困ってるって何で気付かないのかな！？」

タブレットの電源を強引に切ったクラスメイトの少女がテオドールの元に歩み寄り、リズとカティアを強引にテオドールから引き離したのだった。

とても爽やかな笑顔で、少女はテオドールに話しかける。

「自己紹介が遅れたね。私はアネット。今日から3年間よろしくねテオドール。」

「お、おう・・・。」

「今日の朝のテオドールのお姫様抱っこ、私も見てたよ。凄くかっこ良かった。それにカティアを突き飛ばした人にあそこまで真剣に怒鳴り散らすなんて、中々出来る事じゃないよ。」

「・・・な、なんか改めて言われると恥ずかしいけどな・・・。」

「別に恥ずかしがる必要なんか無いって。テオドールが迅速にカティアを保健室に連れて行ったお陰で、こうしてカティアも軽症で済んだんだから。」

こうしてテオドールと親しそうに話すアネットは、とてもさばさばした性格で飾り気の無い親しみやすい少女のようだった。

テオドールもどこかアネットに、リズとは違った話やすさを感じていたのだが・・・。

「・・・また1人、変なのが増えた・・・！！」

漆黒のオーラを全身から燃えたぎらせながら、リズが物凄い表情でアネットを睨み付けていたのだった・・・。

カティアもリズの腕にしがみつき、2人の親しそうな会話を焼きもちを焼きながら見つめている。

「ところでテオドールってさ。XboxOne 持ってる？」

「え？まさかアネットも XboxOne 持ってるのか！？PS4 持ってる奴は多いけど、XboxOne 持ってる奴は中々見かけなくて、全然話が合わなくてさあ！！」

「うんうん、面白いソフト多いのにな！！私今『雷電V』をやり込んでる所なの！！」

「おお最近発売されたばかりの弾幕シューティングだよな！！俺も進学祝いに父さんに買ってもらったばかりなんだ！！あれ面白いよな！！」

「・・・なんか私とテオドールってさ、凄く話が合うって思わない？」

「おお俺もそう思ってた所・・・」

言いかけたテオドールの右手を強引に掴んだリズが、そのままテオドールを教室の外へと連行したのだった。

いきなりの出来事にテオドールは戸惑いを隠せない。

「ちょ、リズ、おま・・・」

「お兄ちゃん、早く帰らないとお母さんが心配しちゃうよ！？はいこれ、お兄ちゃんの鞆！！」

「お、おう・・・だけどカティアとアネットが・・・」

「あの2人の事はもういいから、お母さんにはお昼までに帰るって言ってあるんだから、早く帰ろ！？」

まあ確かにリズの母親には「昼までに帰る」と伝えてあるのは事実だ。

その母親が心配すると言われれば、さすがのテオドールも黙ってリズに従うしかないのだが。

大人しくリズに手を引っ張られるテオドールを、カティアとアネットがとても名残惜しそうに見つめていたのだった・・・。

4. 部活動は何にする？

「そこの貴方、吹奏楽部に入らない！？うちは未経験でも全然大丈夫だよ！！」

「女子サッカー部に入りたい人～、初心者でもオッケーで～す！！」

「俺たちと一緒に美術部で最高の思い出を作ろう！！」

テオドールとリズが通う私立マブラヴ学園は去年発足したばかりの学校であり、3年生が存在せず上級生が2年生しかいない。

入学式の翌日の朝から、その2年生たちがごぞって1年生たちに部活の勧誘を始めていた。

テオドールとリズの元にも2年生たちが殺到し、勧誘のチラシを何枚も渡していったのだが・・・。

「リズ。お前、部活どうする？」

今日の授業が終わった後、テオドールは渡されたチラシを何となく眺めながら、すぐ隣で穏やかな笑顔でテオドールを見つめるリズにそう問いかけたのだが。

「私、お兄ちゃんと一緒に部活に入る。」

即答だった。

リズにとって部活の活動内容など本当にどうでもよく、ただ単に少しでも長い時間をテオドールと一緒に過ごせればそれでいいのだ。

テオドールが野球部に入りたいと言えば野球部に入るし、吹奏楽部に入りたいと言えば吹奏楽部に入る。

「お前なあ・・・俺が入る部活に女子も入れるとは限らないんだぞ？」

「いいもん。その時はマネージャーとして入るから。」

「だったら私もテオドールさんと同じ部活に入ります！！」

そこへ乱入したカティアを、リズが全身から漆黒のオーラを放ちながら、物凄い表情で睨みつけたのだった・・・。

互いにテオドールの腕にしがみつきながら、睨み合う2人・・・昨日と同じ光景が繰り返されていた。

「アネット。お前は どうするんだ？」

「ごめんね、私はファミレスでバイトがあるから部活やる暇なんか無いんだ。高校に入ったら自分のお小遣いは自分で稼げて両親に言われててさ。」

「そうか・・・俺も どうしようかなあ・・・部活に入らずにバイトでもやるかな・・・。」

リズの両親は遠慮なんかしないでいい、気を遣わなくてもいいとテオドールに言ってくれているのだが、それでもテオドールはホーエンシュタイン家に居候させて貰っている身なのだ。

アネットと同じように自分の小遣い位は自分で働いて稼いで、少しはリズの両親に恩返し出来たら・・・と思っていたのだが。

「だったらテオドールもさ、私と同じ店で働いてみない？店長が人手が足りないから何人か紹介してくれて私に頼んできててさ。」

「ファミレスでバイトか・・・俺、料理なんてやった事ないけど本当にいいのか？」

「お兄ちゃん、お父さんとお母さんに変な遠慮なんかしないでいいってば！！」

テオドールの心情を察した・・・というかアネットにテオドールを取られたくないリズが、強引にテオドールをアネットから引き離したのだった。

昨日と同じようにテオドールの右手を引っ張り、教室から連れ出していく。

「そーゆーわけだからアネット、私たちはこれから部活の見学に行くから。」

「おいおいリイズ、ちょっと待ってっ…」

「あ、待って下さいテオドールさん、私も一緒に行きます！！」

今の世の中、アルバイトを禁止して部活動の参加を生徒に強制する学校も多いのだが、マブラヴ学園では部活動の参加の是非は完全に生徒の意思に委ねられている。

なのでアネットと同じように、部活動に参加せずにアルバイトに精を出したり、あるいはアルバイトにも行かずに真っ直ぐ帰宅したり遊びに行く生徒たちも多いようだ。既に数多くの生徒たちが学園を後にし始めていた。

そして今日の朝と同じように、沢山の2年生たちが1年生たちへの勧誘に熱を入れ始める。

運動系、文学系共に豊富な種類の部活動があるのだが、テオドールはどこに入ろうか正直未だに決めかねていた。

テオドール自身、中学時代はサッカー部に所属しており、弱小校ながらもそれなりに楽しくやれていたのだが、サッカーだけでなく色んな選択肢も視野に入れておきたいと思っているのだ。

「ねえ貴方たち、良かったら文芸部の見学に来ない？」

そんなテオドールの元に、とても穏やかな笑顔の黒髪の少女が話しかけてきた。

見た所ドイツ人ではなく、海外のアジア諸国からの留学生のようだ。

「まあ文芸部と言っても、部員は今は私1人しかいないんだけどね…。」

「文芸部ですか…俺、本なんて漫画しか読まないんですけど、本当にいいんですか？」

「全然大丈夫よ。そんなに気難しい部活動じゃないから。さあ、こんな所で立ち話も何だから、3人共中に入って。」

「じゃあ見学だけでもしてみるかな…失礼しま〜す。」

少女に案内されてテオドールたちが教室の中に通されると、そこには片付けられた室内の中に、大きな折りたたみ式の机とパイプ椅子が部屋の中央にポツンと1つだけ置かれていて、さらに本棚には大量の本が並べられていた。

その1つしか置かれていない机の隣に、少女はさらに机とパイプ椅子を3人分追加する。

促されるままにテオドールたちが席に座ると、少女は慣れた手つきで紅茶を差し出してきた。

「はい、どうぞ。」

「ああ、ありがとうございます、先輩…。」

「私はベトナムからの留学生のファム・テイ・ラン(范氏蘭)よ。よろしくね、テオドール君、リイズちゃん、カティアちゃん。」

「俺らの事を知ってるんですか？ 一体どうして…」

「どうしても何も、テオドール君の入学式の日活躍を知らない生徒なんて、もうこの学校にはいないわよ？」

「…はあ…。」

「うふふ、テオドール君ったら、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに。」

あれだけの騒ぎになってしまった上に、ネットでテオドールがカティアをお姫様抱っこする画像まで流出してしまっているのだ。無理も無いだろう。

「それはそれとして、本題に入ろうかしら・・・文芸部と言ってもテオドール君たちが想像してるような堅苦しい活動じゃないのよ？漫画でも何でもいいから、互いに気に入った本を読んで感想を言い合うだけの気楽な部活動なの。」

「はぁ・・・まあ漫画でもいいなら、文芸部もアリかな・・・。」

「気に入ってくれたかしら！？じゃあ早速この入部届にサインを・・・！！」

「いや、俺まだこの部活に入るって決めた訳じゃありませんから。他にも色々と見てみますよ。」

この学園には様々な種類の部活動があるのだが、それでも可能な限りは一通り目を通しておきたいと、テオドールはそう考えているのだ。

自分の目で見て、自分の身体で感じて、自分の頭で考えて・・・どの部活に入るのかを決めるのはそれからだ。

一度きりの学園生活・・・後悔だけはしたくない。

「あらそう、残念。でも気が向いたらいつでも声をかけて頂戴ね。」

「でも選択肢の1つには入れておきますよ、ファム先輩。それじゃあ俺たちはこれで・・・」

だがテオドールが立ち上がろうとした、その瞬間。

「・・・私の事はお姉ちゃんって呼んでいいのよ・・・？」

突然ファムが立ち上がり、その豊満な胸にいきなりテオドールの顔を埋めたのだった・・・。

いきなりの出来事に、テオドールもリズもカティアも驚きを隠せない。

予想外の事態、そしてファムの身体の温もり、甘い匂い、胸の柔らかさが、テオドールの思考を完全に混乱させてしまっていた。

「もが、もがが・・・！？」

「ちょっとファム先輩！！お兄ちゃんに何やってるんですかあっ！？」

「何って、テオドール君とのスキンシップだけど？」

「離しなさいよおっ！！これはもうスキンシップっていうレベルじゃないでしょ！？」

「い～や。テオドール君が私の事をお姉ちゃんって呼んでくれるまで、離してあ～げないっ♪」

一体全体何がどうしてこうなった・・・ファムの胸に顔を押し付けられて視界が遮られる中、リズが全身から漆黒のオーラを放ちながら、物凄い表情でファムをテオドールから引き離そうとしているのを感じながら、テオドールは今自分が置かれている状況を必死に把握しようとする。

そんな中カティアは、机の上に置かれていた本のタイトルを見たのだが・・・。

『姉と弟』

『禁断の恋』

『私は弟を好きになる』

『近親相姦・・・お姉ちゃん僕もう我慢出来ないよお。』

「・・・うわあああああああああ、うわあああああああああああああああああああ(汗)！！」

カティアから本のタイトルを聞かされて、テオドールは慌ててファムを振りほどいたのだった。

「アンタは一体何なんだあああああああああああああああああああ！？」

「きゃっ！？ちょっとテオドール君！？」
「リズ！！カティア！！今すぐにここから逃げるぞ！！」
「あんっ、ちょっと待って、テオドール君~~~~~！！」

慌てて逃げ出す3人を、興奮しながら物凄い表情で追いかけるファム。
なんかもう、異様な光景が繰り広げられていた・・・。

「待ってテオドール君！！私、テオドール君みたいな弟が欲しいって、前からずっと思っていたの！！」

「アンタの部活動に部員が集まらないのは、そもそもアンタのそのイカれた性癖が原因なんじゃないのかあ！？」

「テオドール君の事は入学式のあの事件以来、ずっと気になっていたのよ！？さあ遠慮せずに！！私の胸に飛び込んで存分に甘えて頂戴！！」

「いや遠慮するわ！！アンタみたいな変態と一緒に部活動なんか出来るかあああああああああああああ！！」

どうにかファムから逃げ出そうとするテオドールたちだが、それでもファムとの距離は一向に縮まらない。

逃げ切れないか・・・テオドールが軽く絶望した瞬間。

「貴方たち、こっちよ！！早く入りなさい！！」
「うおおおおおおおおおおおおおおお！！？」

突然教室から伸びた手がテオドールを掴み、テオドールを教室の中に引きずり込む。
リズとカティアも後を追って教室の中に入り、慌ててドアを閉めて鍵を掛けたのだった。
ドアの奥からドンドンドン！！というドアを叩く派手な音と、テオドールの名前を叫ぶファムの興奮した叫び声が響き渡る。

「・・・た、助かった・・・のか・・・！？」
「3人共、危なかったわね。彼女はこの学園の中でも危険人物の1人なのよ。」

肩で息をするテオドールに、1人の少女が優しく語り掛けてきたのだが・・・。

「あ、あの・・・アンタは・・・」
「私はこのシューター部の部長を務めるベアトリクス・ブレーメよ。」

なんかまた変なのが来た。

「シューター部！？シューター部って一体何なんだよ！？」

シューター部・・・一体どんな部活なのか、テオドールは全然皆目検討つかなかった。
先程のファムにしてもそうだが、どう考えても怪しい部活だとしか考えられない。
見た所教室の中に怪しい所は特に無く、机の上にポツンとノートパソコンが置かれているだけなのだが。

ベアトリクスはとても妖艶な笑みを浮かべながら、そのノートパソコンの液晶画面をテオドールたちに見せたのだった。

そこに映っていたのは・・・

「「…な…なんじゃこりゃあああああああああああああああ！？」」

「これが我がシューター部が誇る『シューター部ファイル』よ。」

「いやいやいやいやいや、これシューター部ファイルっていうか個人情報じゃねえかよ！！」

このマブラヴ学園の生徒とその保護者、教師、取引先、関係者全ての個人情報やら極秘情報やらが記載された、文書と画像の膨大なファイルの一覧だった。

よく見ると先日テオドールが自宅で風呂に入っている時の画像までもが、しっかりと保存されていたりする。

全裸のテオドールの画像を見て、思わずリズとカティアは顔を赤らめて興奮したのだった…。

「待て待て待て待て待て、一体どうやって撮ったんだよこれ！？つーか普通に犯罪だろうが！！」

「私たちシューター部の活動内容はね…こうやって集めた極秘情報をシューター部ファイルに記録して、部の皆でニヤニヤしながら内容を吟味して楽しむ事よ。さあ貴方たちも私たちと一緒に…」

「うわあああああああ、うわあああああああああああああああああああ(汗)！！」

またしてもリズとカティアを連れて、逃げ出す羽目になってしまったテオドール。

ドアの前で待機していたファムが、それはとつても嬉しそうな表情で、再びテオドールを追いかけて始めたのだった…。

「あ、待って、テオドール君！！」

「畜生、一体全体何がどーなってんだよおっ！？」

「テオドール君、私の弟になってえっ！！」

なんかもう涙目になりながら、必死にファムから逃げ続けるテオドール。

そんなテオドールに対して、またしても別の教室から救いの手が。

「君たち、こっちだ！！早く入りたまえ！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！？」

腕を引っ張られたテオドールは教室の中に転がり込み、リズとカティアも慌ててそれに続いてドアの鍵を閉めた。

またしてもドンドン！！と扉を叩く音が響くが、もう今のテオドールにはそれを気にする余裕すら無い。

テオドールを助けたのは、とても爽やかそうな印象を受ける男子生徒だった。

「危ない所だったね。彼女はこの学園の中でも危険人物の1人なんだ。」

「そ、それ、ベアトリクス先輩からもさっき聞いたんだけど…。」

「何だって！？もしかしてあの女、君たちをシューター部に誘ったのか！？」

「いや誘ったっていうか、俺が昨日風呂に入ってる所を覗かれたっていうか…。」

「あの女には今後一切関わらない方がいい。それは君たちも身に染みて分かった事だろう。」

「俺だってもう二度と関わりたくねえよ(泣)！！」

男子生徒に助け起こされたテオドールが改めて教室の中を見渡してみると、そこは先程のシューター部と同じように、一台のノートパソコンがポツンと置かれていたのだが。

なんかテオドールは嫌な予感がした。

「・・・ま、まさか・・・」

「自己紹介が遅れたね。私は反乱部の部長のハインツ・アスクマンだ。」

「反乱部！？反乱部って何なんだよおい！？」

「当然、あの憎きベアトリクス率いるシュター部に反乱する為の部活動だ。私も以前はシュター部に所属していたのだがね、あの女に嫌気が差してこうして反乱を起こしたという訳だ。このノートパソコンには奴らの個人情報や極秘情報が・・・」

「それで部の皆でニヤニヤしながら楽しむってかあ！？」

「さすがテオドール君、よく分かってるじゃないか！！」

感動したアスクマンはとても嬉しそうに、ハアハアと興奮しながらテオドールをぎゅっと抱き締めたのだった。

いきなりの出来事にテオドールは戸惑いを隠せない。

「ちょ・・・！？」

「君の事はあの入学式の時からずっと気にしていたんだ。どうだね？私と一緒に反乱部で活動するつもりはないかな？そしてあの憎きベアトリクスのクソ女を叩きのめそうではないか。」

「せ、先輩、どこ触って・・・あんっ！！」

「いや、いっそ君には私と兄弟の契りを交わして貰いたい・・・ハア・・・ハア・・・そしていつまでも2人で共に暮らしていこおぶええっ！？」

リズとカティアの飛び蹴りを食らったアスクマンが、派手に壁に叩き付けられたのだった。

「テオドールさん、大丈夫ですか！？」

「貴様あ、私のお兄ちゃんに何さらしとんじゃボケえ！！」

「ぬう、たかが妹キャラの分際で、私とテオドール君の仲を引き裂こうというのか！！」

「畜生、この学校にはまともな部活動が存在しないのかよおっ！？」

またまたリズとカティアを連れて、教室から逃げ出す羽目になってしまったテオドール。今度はファムだけでなく、アスクマンまでもが興奮しながら追いかけて来た。

「テオドール君、待ってえ！！」

「待つんだテオドール君！！」

「待てるかあああああああああああああああああああっ(泣)！！」

なんかもう涙目になりながら、テオドールたちは必死にファムとアスクマンから逃げ続けたのだった・・・。

5. 誇り高き少女

「な、何とか無事に逃げ切ったようだな・・・。」

辛うじてファムとアスクマンから逃げ切ったテオドールたちだったが、結局この2人のせいで他の部活動の見学をまともに行えないまま、学園の敷地内から遠く逃げ出す羽目になってしまった。

どうにか乱れた息を整えたテオドールが周囲を見渡すと、既に日が沈みかけて夜になろうとして

いた。

薄暗い夕焼けの景色の中、大勢の帰宅途中のサラリーマンやら学生やらがテオドールたちの隣を足早に通り過ぎていく。

「…もうこんな時間か…そろそろ帰らないと父さんも母さんも心配するだろうな…。」

「結局部活の見学どころじゃなかったね、お兄ちゃん…。」

「仕方無いさ。また明日にしようぜ。」

「うん。」

屈託の無い純真な笑顔をテオドールに見せるリズ。

そう…「テオドールに対して」は。

「それではテオドールさん、誠に遺憾ながら、私の家はこちらなので…。」

「おう、また明日な。カティア。」

「さっさと行きなさいよカティアちゃん。しっしっ。」

交差点に差し掛かった所で笑顔で手を振りながら帰路に着くカティアを、リズが物凄い表情で追い払う。

これで邪魔者は消えた…リズはととても嬉しそうな表情でテオドールの左腕にしがみついたのだった。

学校ではテオドールの入学式の時の活躍があったからなのか、テオドールに好意を寄せる女子たちが立て続けに現れているのだが、それでも家の中では誰にも邪魔なんかさせない…リズはテオドールの左腕をぎゅっと握り締めながら、そんな強い信念みたいな物を胸の内に抱いていた。

(…お兄ちゃんは中学の頃は全然モテなかったのに…それなのに急にお兄ちゃんに言い寄ってくる女共が、こんなにも立て続けに現れるなんて…。)

「それにしても、今日は本当に散々な1日だったなあ…。」

「本当にそうだよ。特にあのアスクマンとかいう変態、一度マジで本格的にシメてあげようかな？」

「やめろよそんな物騒な事…。」

まあお前の気持ちは分からなくもないけどな…うっかりそんな事を口にしようものなら、リズなら本気でやりかねないもんだから、テオドールは敢えて口にしなかったのだが。

「…だけどお兄ちゃん、あの時も言ったけど、お父さんとお母さんに変な気を遣わなくてもいいからね？」

不意にリズが、とても真剣な表情でテオドールにそう切り出した。

いきなりのリズの変貌振りに、テオドールは戸惑いの表情を見せる。

「きゅ、急にどうしたんだよリズ…。」

「アネットがお兄ちゃんをファミレスのバイトに誘った時の話。」

「…ああ、その話か。だけど俺も父さんと母さんに養って貰ってる身だからなあ、アネットみたいに自分の小遣い位は自分で稼いでもいいんじゃないかと思うんだけどな。」

別に今の小遣いの額に不満がある訳ではない。むしろ他のクラスメイトにも聞いてみたのだが、テオドールの小遣いの金額は彼らと比べても多い程だ。

それ程までにテオドールは、リズの両親からとても大切に扱われているのだ。

だからこそテオドールは、身寄りの無い自分を救ってくれたリズの両親にとっても感謝しているし、いつか何らかの形で恩返ししたいと本気で思っている。

「それになリズ…俺もいつまでも父さんと母さんに、迷惑を掛け続けてはいけないと思ってるんだ…。」

「迷惑だなんて、そんな…！！」

「…高校を卒業してから自立する為の資金を貯める意味でも、アネットの店でバイトを…」

「お兄ちゃんの馬鹿あつ！！」

「うお！？」

何故リズがいきなり自分を怒鳴り散らしたのか、全然意味が分からなかったテオドールだったが、その時だ。

いつの間にか近くの路地裏で、何か騒ぎになっているようだった。

慌ててテオドールが駆けつけて覗いてみると、1人の少女が路地裏の中で4人のガラの悪い男たちに絡まれていた。

少女はテオドールたちと同じマブラヴ学園の生徒のようで、制服のエムブレムから察するに2年生のようだった。

男たちはとてもニヤニヤしながら、少女を壁際に追い詰め逃げられないように取り囲んでいる。

「なあなあ姉ちゃん。どうせ暇なんだから？俺らと一緒に遊ぼうぜ。」

「美味しいもん食わせてやっからよ。」

「俺らが最高にいい気分させてやるよ。」

丁度サラリーマンや学生の帰宅時間と重なる事もあって、路地裏の近くを多くの通行人たちが通りかかっているのだが、その誰もが男たちに怯え、見て見ぬ振りをして通り過ぎていってしまう。

中には勇敢にも、少女を助けようと男たちに声を掛ける者もいるにはいるのだが…。

「き、君たち…。」

「ああ！？てめえなんか文句あんのかコラァ！！」

「ひ、ひいひいひいひいひいひいひいひいっ！！」

突然男の1人にナイフを突きつけられ、怯えて逃げ出してしまったのだった。

その様子を見たテオドールは舌打ちし、男たちに見つからないよう隠れながら、どうすれば少女を無事に助け出せるか、必死に思考を巡らせていたのだが…。

「お、お兄ちゃん…。」

「リズ、ここにいると危険だ。お前は早く近くの交番まで警官を呼びに行ってくれ。」

「まさか、あの人を助けるつもりなの！？」

「あんな事されてんのに放っておけるわけねえだろ！？」

「だけど…！！」

「いいから早く行け！！」

「……。」

どうやらテオドールの意思は堅いようだった。こうなったらもう、無事に少女を助け出せるまでテコでも動かないだろう。

本当にお兄ちゃんは頑固者でお人良しなんだから…！！そう心の中で呟きながら、リズは仕方なくテオドールに背を向けた。

「・・・お兄ちゃん、絶対に無茶は駄目だよ!？」

「ああ、分かってるさ。」

「絶対に絶対に無茶は駄目だからねっ!？」

大急ぎで近くの交番まで、全速力で向かうリズ。

それを見届けたテオドールは改めて男たちに視線を戻し、少女を無事に助ける手段を必死に頭の中で模索していた。

相手は4人。しかも全員が武器を持っているようだった。

1人だけなら不意を突けば何とかなるかもしれなかったが、さすがに4人となると分が悪過ぎる。

リズが交番まで警察を呼びに行き戻ってくるまで、恐らく5分程度といった所だろうか。

安全を第一に考えるなら、それまでに自分は一切動かずに警官が来るのを待つのがベストなのだろうが、それまでに少女が無事で済むという保障は無い。

それにしても・・・テオドールは4人の男たちよりも、むしろ壁際に追い詰められている少女の気高き姿に目が離せずいた。

この状況にも関わらず平然と腕組みをし、全く怯えた様子も見せずに男たちを厳しい視線で睨み続けているのだ。

大の男でもこんな状況では、怯えてしまってもおかしくないというのに・・・。テオドールは少女のこの威風堂々とした姿に感銘すら覚えてしまっていた。

「悪いが私は、お前たちのような下賤な者どもと付き合うつもりは微塵もない。」

「おっ、いいねえいいねえ。俺は姉ちゃんみてえな強気な女が好みなんだわ。」

「女1人を口説こうというのに、大の男が4人がかりで、しかも凶器まで持参とはな・・・お前たちの勇気の無さには本当に失望させられる。」

「・・・てめえ・・・あんまりいい気になってんじゃねえぞコラ。折角こっちは穏便に済ませてやろうと思ってんのによ。」

「その薄汚い手で私に触るな・・・!!」

パンッ!!

少女が自分の肩を掴んだ男に平手打ちすると、ブチ切れた男が少女に掴みかかったのだった。

「てめえ、マジでぶっ殺すぞコラあっ!!」

「畜生、5分どころか1分も持たなかったじゃねえかよおっ!!」

「な・・・!?ぐはあっ!!」

止むを得ず少女に掴みかかった男を殴り倒したテオドールは、そのままの勢いで少女の手を掴み走り出す。

「走れるな!?ここから逃げるぞ!!来い!!」

「てめえ、いきなり何しやがる!!待てやコラあっ!!」

「悪いがお前らの相手なんか、まともにするつもりはねえんだよおっ!!」

たまたま近くに置いてあった看板を男たちに投げつけ、男たちが怯んだ隙を突いてテオドールは路地裏を飛び出し、リズが向かった交番がある方角へと走り出した。

この方角に交番がある事は、地元の間人なら誰もが知っている。それに路地裏を飛び出してしまえば多くの通行人の目を引いてしまう。この状況ならさすがに男たちも追っては来ないだろうと・・・

そうテオドールは判断したのだが……。

「待ちやがれこのクソ野郎があつ！！」

「くそつたれ！！あいつら完全に頭に血が昇ってやがる！！」

激怒した男たちは全く意に介する事無く、テオドールと少女を追いかけてきたのだった。

テオドール1人だけなら逃げ切れる自信はあったが、少女の手を引いているというハンデを背負っている以上、追い付かれるのは時間の問題のようだ。

少女も運動神経はいいようだが、それでもテオドール程ではないようだ。完全にテオドールの足を引っ張ってしまっていた。

交番までの距離が物凄く遠く感じる。少女が足枷となって全力で走れないのがもどかしい。

「くそっ、このままじゃ追い付かれる……！！」

「おい、私に構うな！！とっとと私を見捨ててお前だけでも逃げろ！！」

「馬鹿野郎！！そんな簡単に諦めてんじゃねえよ！！」

「何故だ、見ず知らずの私なんかの為に、何故お前はそこまで必死になってくれる……！？」

「目の前で困ってる人がいるってのに、何もせずにじっとしてられるわけねえだろ！？」

「……お前……！！」

それでもテオドールは、何としてでもこの少女だけでも無事に助け出す決意を秘めていた。

このままでは逃げ切れない……こうなったら俺が壁になってでも、彼女だけでも……テオドールが覚悟を決めたその時だった。

突然背後から鳴り響いた、パトカーのけたたましいサイレンの音。

「お兄ちゃん、おまわりさんと呼んできたよ！！」

「貴様らそこを動くな！！銃刀法違反の現行犯、及び暴行未遂の容疑で逮捕する！！」

リーズの声が聞こえた瞬間、パトカーから数人の警察官が飛び出し、あっという間に男たちを拘束してしまった。

そのまま手錠をかけられ、問答無用でパトカーの中に連行されてしまう男たち。

何とか無事に逃げ切る事が出来た……すっかり緊張の糸が切れたテオドールは、大きな溜め息をしながら思わずその場に座り込んでしまった。

「お兄ちゃんの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿あつ！！」

「うおわあつ！？」

そんなテオドールの顔を、リーズがとても泣きそうな表情で自らの胸に埋める。

リーズの身体の温もり、とてもいい匂い、そして胸の柔らかさに、思わずテオドールは赤面してしまう。

「ちょ、リーズ、おま……」

「絶対に無茶はしないでって言ったのに、それなのに何でこんな事になってるのよおっ！？」

余程テオドールの事が心配だったのだろう。リーズはテオドールの顔を両腕でしっかりと抱き締め、自らの豊満な胸から決して逃そうとしなかった。

テオドールもリーズに心配をかけてしまった事を自覚しているようだ。リーズの両腕が震えているのを感じながら、申し訳ない気持ちで一杯だったのだが……。

「・・・ありがとう。お前たちのお陰で私は無事に助かった。礼を言わせてくれ。」

警察官からの事情聴取を終えたテオドールに、少女が穏やかな笑顔で頭を下げてきた。テオドールはとても照れた表情を見せたのだが、テオドールを危険な目に遭わせた張本人である事から、リズが全身から漆黒のオーラを放ちながら、物凄い表情で少女を睨み付けている。

「自己紹介がまだだったな。私はアイリスディーナ・ベルンハルト。アイリスと呼んでくれ。」

「俺はテオドール、こっちは妹のリズ・・・しかし何でまたあんな所で不良共に絡まれてたんですか？アイリス先輩。」

「敬称も敬語も不要だ。普段は母が私を車で送迎してくれるのだが、たまには気分転換に1人で歩いて帰りたいと思い、母に無理を言って1人で帰路についていたのだがな・・・」

「それで奴らに目を付けられたという訳か・・・。」

「我ながら情けない話だ。これでは母に申し訳が立たない。だがお前たちのお陰で本当に助かったよ。」

「何だよ、物凄く平気そうな態度してたくせに。」

「いや内心では凄く怖かったんだ・・・本当に怖かったんだよ・・・。」

アイリスディーナは涙目になりながらも穏やかな笑顔で、じっ・・・とテオドールの顔を見つめ・・・両手で優しくテオドールの顔を包み込み・・・

「ちょ・・・！？」

「お前は本当に勇敢で心優しい男なのだな・・・他の者たちは私を見捨ててさっさと逃げ出してしまったというのに、お前だけは身体を張って私の事を助けてくれた。」

「ちょっとアイリス、顔が近い・・・」

「私はこれまでも両親から、将来の許婚となるべく男たちを何人も紹介されたのだがな・・・どいつもこいつも両親の地位や財産が目当てのクズ共ばかりだった。だがお前は違う。お前は私の家柄や立場などお構い無しに、本気で私の事を心配してくれたんだ。」

「いや、許婚とか家柄とか立場とか、アンタ一体何者・・・」

「お前のような男に出会ったのは生まれて初めてだ・・・そしてこんな気持ちになったのもな・・・。」

ちゅっ。

アイリスディーナはテオドールと唇を重ねた。

いきなりの出来事に訳が分からないテオドールだったが、唇を離したアイリスディーナは、とても可愛い笑顔でテオドールに見せ・・・

「よし決めたぞ。お前を私の未来の夫にする。」

「「・・・はあああああああああああああああああああああ！？」」

多くの人々が見ている公衆の面前で、テオドールとリズにはっきりと宣言したのだった・・・。